

# 蓄積を / にたつ

2021.11.18(木)-12.1(水)

11:00-17:00 \*日祝休

東京都小平市小川町1-736 武蔵野美術大学2号館1階FAL

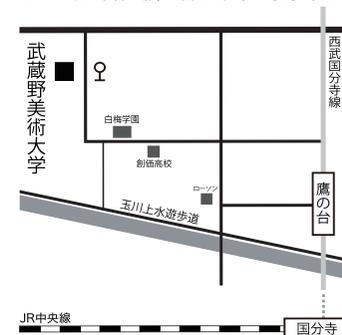
片山初音 Hatsune Katayama

## ACCESS

武蔵野美術大学2号館1階FAL

東京都小平市小川町1-736

- JR立川駅北口より立川バス”武蔵野美術大学正門”下車
- JR国分寺駅北口より西武バス”武蔵野美術大学正門”下車
- 西武国分寺線 鷹の台駅下車 徒歩約20分



The Fine Art Laboratory **FAL**

片山初音 Hatsune Katayama

1998 埼玉県生まれ

2019 武蔵野美術大学造形学部油絵学科油絵専攻卒業  
東京都在住

2019 「木曾ペインティングス vol.3 夜明けの家」  
木曾藪原宿大半跡地の空き地（長野）

2020 「令和元年度武蔵野美術大学卒業制作展」 優秀賞受賞（東京）  
「令和元年度武蔵野美術大学卒業・修了制作優秀作品展」  
武蔵野美術大学美術館（東京）

2021 個展「足の下のかたさ」LIVE スタジオ 696 倉庫（埼玉）

HP : [hatsunekatayama.com](http://hatsunekatayama.com)

QRコードからでもご覧頂けます。▶





2020 installation, 木,  
令和元年度 武蔵野美術大学 卒業制作展  
造形学部油絵学科油絵専攻 優秀賞受賞



「空き地、土と穴」  
2019, installation, 木・土,  
木曾ペインティングス vol.03 夜明けの家



## 片山初音と「場所」について

私たちは今どこに居るのだろうか。Google アースを使えば自由にどこにでも行くことは出来る。しかし生身の身体は重力によって地表に引き寄せられ今ここという場所に留められる。

片山は学生時代から、土や木などの素材を使ったインスタレーション作品を制作しながら、徐々にそれらが実在していた場所について考察を巡らせてきたように思う。それは長野県木曾路で行われた「木曾ペインティングス vol.3 夜明けの家 (2019)」で見せた、空き地に穴を開けそこに煙突のような塔を立てた作品や、「2019 年度武蔵野美術大学卒業制作展 (2020)」で優秀賞を受賞したアトリエの床を数センチ上げた作品、また「個展／足の下のかたさ (2021)」で発表した、大きな倉庫の床一面に少しの風でもたなびくように敷かれた2枚の布と布の間を歩かせる作品からも伺える。では今回のFALでの作品はどのようなものになるのだろうか、片山は昨年冬に青森県の白神山地を訪れた時に、その地下に流れる水について思いを馳せ、そこから今回の作品についての構想を得たようである。

私たちは常に場所と共にある。場所がなければどんな物も存在することすら出来ないだろう。とはいえ往々にして場所を付随的なものと捉え、主体であるものだけに関心を向ける。

場所の特性を表す〈ゲニウス・ロキ〉という言葉がある。土地の持つ精霊や地霊という意味合いだが、そこにある歴史や建物がつくり出す固有の雰囲気といってもいいだろう。そしてそれは共同体にも大きな影響を与えるものである。

片山は場所について思考を重ねる。そしてそれがどれだけ知らず知らずのうちに主体である私たちに影響を与えているのか、普段は気にもしないであろう足元にオーディエンスの注意を向けさせることによって、意識下にある場所という存在を思い起こさせる。

それは即ち場所を捉え直すことで共同体を視つめることになり、その奥にある主体を捉え直すということでもある。その様な試みを通して、初めて私たちは主体の自立についても考えを巡らすことが出来るようになるのではないかと。片山の作品は静かにそのことを問いかけているようである。

2021年10月15日

丸山直文

## 水のない水辺から

冬に山歩きをしに行った。皆寒そうに駐車場からほど近い観光地化されたコバルトブルーの池を見ては引き返していったが、私は少し奥まで行くつもりだったので足早に脇の道を進んだ。

山の中には多くの湖があり、池、むしろ沼と呼ぶべきか判断つかぬものがほとんどだった。いくつも目にするうち、おやこれはさっきの沼ではないか、そう思う物も多く、まるで先ほどまでそこに腰掛けていた池や沼が一足先に発ったかのような不思議な感覚だった。そして特にここがゴールだという地点を得ぬまま、ぐるりとスタートした青い池へと戻ったのだ。

山歩きを終え、暖を取る為に入った休憩所の案内図に私の湖や池が移動しているという感覚の答えがあった。この辺りには三十三の湖、池、沼があり、その多くはもともと一つの川だったというのだ。1704年に起きた大地震によって山が崩れ、堰き止められた川から形成されたと推測されている。私は興奮を覚えた。やはりあれらは一つのものだったのだ。表面に水として表れずとも私の足の下を目に見えぬ流れとして移動している。それは、はっとするものだった。

今まで歩いてきた山の中で幾度となく水の音を聞いてきた。それをどこかに川があると思ってきたが、あれらは足の下音だったのではないかと。

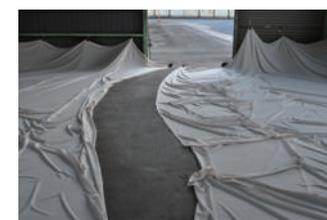
突然今自分が立っているそこが信頼と違う領域のものに思えた。急に足元に大きな穴が空いた様な、地に足がつかない恐怖に襲われ、地というものを無条件に信頼をしていたことを知った。いつからそこが疑い様のない地面、底面だと思っていたのか。その下に何かあるのか何が起きているのか知らないのに。

これは気がついてしまえばどこにいても同じことだった。私たちは無意識に生活する地面をできるだけ強固で疑い用のないものにしようとしているが、その実知らぬ間に様々な地下空間の上立っている。確かなものだと思われるその下に何かあるのか知らず、ここが底面なのか天井なのかすらわからない。私の足は今、地についているだろうか。

片山初音



「足の下のかたさ」 2021, installation, 布・ロープ



「浮かぶ三艘、または三基」 2019, installation, 網・灰紐

「水を集める地面、一観水を通す」 2018, installation, 木・網・紐・コンクリートブロック

蓄積を/にたの